

三月廿三日 東風にて朝より陰 午後ばかり風雨甚し

内膳の子息船迄見送る 社地の側ハ大河なり内膳が庭前を流る 今日此川の流に随て新宮へ下るとて 本宮の社内より川辺に出て乗船するに 川は淵瀬有水音高く屈曲して急流矢を射る如し 両岩の岩石甚奇なり 舟長ささまゝの名とところをいへど させて耳にとどむるべくもあらず 左右に数ヶ村あり 岩ン壁数千丈 山あり谷有瀧處々にあり此渡り九里八丁といふ

新宮へ

紀州の倍臣^{マツ} 安藤対

乗合式拾四人 壺人の賃錢百三拾文 数刻ならずして新宮へ上る 紀州の倍臣^{マツ}安藤対

馬守

馬守が城下なりと

船中より左の方に城見ゆ 地面は州崎にて高き處に有 町へ出て新宮の下馬前茶屋あり 雨しきりなれば爰にて昼ス

船は惣昧黒ぬりに画き 彩色たり いかなれば如此する^{マツ}と問 見劣れり 神名は国常立の尊より簇々と立並べ奉る 長屋作りの御堂なり 町々は和の郡山位なるべし

舶上りの川ハ直ニ海也 州崎の右ハ城の堀 櫓木立の中に白々と見ゆ 町を出端れて

海辺坂道を登り下る 三輪カ崎と云村有 漁舟多くあげ並べたり 姿ハ奥にていふ三羽
舟の如くにして 長くそりたる物なり 舟腹さきともに菊牡丹など画きて 丹青を以彩
り甚見事なり 広津村みたらひ浜といふ

天狗たらいの岩

沖には小島所々に有 老松造り植たるが如し けしき松嶋に似たり 懸り船芦原の如

周助という小家 浜

し又坂道を通り 左りに天狗たらいと云岩あり 野形へ出て宇具井と云村に至れば晚景

ゆふ此辺にて多く万

也雨はをやみなし 風冷に立てすゝむべくもあらねば わびながら爰に宿す

年草に似て葉組よく

海より少し引上りて町作りたる村なり周助といふ小家也 此辺の泊にて向キの大又の

真ン立色よし

宿に相やとりしたる泉州堺の老女三人連に前後になりて物語ス

志じき嶋景色あり

三月廿四日 東風にて終日雨 けふハ風冷かに雨ふりしきり 殊に数日歩^マ行続きたれ

弁天宮佐野村此浜に

はとて 此宇久居に逗留

名石あり那智黒と里

人いふ

二位の石塔あり い

三月廿五日陰 宿を出て小津峠と云を越て 浜ノ宮と云村有女人堂のごとし 是ハ麓

かなる故ある事にや

ニて拝し奉るために安置せりと見ゆ 禰陀楽山と云額を打たり

太夫の松 狐しま稲

則山の觀世音および熊野の山上ニハ寺院並宿坊多し 各登り下りて寺門有 又一段石

荷社

壇を登れば本堂横合に立せ給ふ 壺番の觀世音也

諸堂多し熊野三社も爰に立せ給ふ 拝し終りて御裏門より拔出て下る 都て御坂を登るより 本堂の御前とも或ハ宿坊へ寄せんと袖引ととめ 又佛前にハ俗人とも並び居て 道志ヲ樂しみむたいふに信心をとるに暇なくて 騒々敷また出て仁王門の右の山道を

仁王門

瀧ありと聞は今そな登れば 程なく霧立こめて山中いよせし大雲取と云難所にかゝる 登りくゝて館と云所

れ那智の山梢に懸る に茶屋あり それより船見峠 貝の口或ハ地藏峠 石倉越前峠など各九折坂の難所なり

白雲と見し 此方の 處々民家一ツ宛猪鹿を守る 田家に劣れり 小口といふ處有 是より坂の折目くゝに

宿坊は実法院と申す 宿屋有 行暮ては雨露を防に便あり 下りくゝて小淵川と云舟渡し也

由 向は小阿瀬といふ 未下刻なれと行向も無覺束步行疲て爰に宿す わびしさおもへや

るべし

三月廿六日 朝霧 ちりくゝと終に雨となる 宿を出れば軒先より坂なり 笠松と云茶屋有 次ハ難所峠此あたりより妙法山と云靈場有て 檀石を左りにして通る 石堂といふ茶屋にて 雨具を用ゆ松茶屋と云は 両三軒奇麗なり

また愛川村といふに出る 是は此辺の宿場にて見せ店有て事足 爰に本宮の枝川有て

舟渡あり 川原に茶屋有爰にて暫ク休らい わらじ替菓子など貰ふ

又登るに本宮の町を眼下に見つゝ 爰にて本宮へ参る下の関の女連に別る

登りくゝて和田心ト云所民家飛々にあるを過て 湯の峯と云本宮の湯へ未の刻早目に

伊奈屋

着 道々に宿屋をとへば 伊奈屋とやらんはよしといふに問よれば 誠におろそかなれ

下風呂の平左衛門

と言入たれば 戻しがたくて彼庄助と云ひわひし合宿す いわば下風呂の平左衛門躰な

り

温泉の山姿ハ何方も似寄りて 家居ハ高低に懸作り有 中ニ山川流れて水底より熱湯

湧出ス そか口に水道を立て高さ式間余り上にて石桶に乘せて湯舟に通はす 留メ湯

小栗判官

男湯 女湯と三ヶ所あり 留メ湯といふハ彼小栗判官のむかし 咄の湯なりとて■を閉

紀の路の村々にてア

錠を卸して注連をはり置 夫に入らん事を望めば百銅なりといふ 誠に入浴す温泉は

ラセイ豆トウモロコシという珍敷

国元にも数多あり 處々のを誠見競るに 凡九州迄に覚へぬ名湯なるべし 潔白は鏡の

草を見る

如し 一度入浴の百銅といひしも宜べなるかな 湯舟も長大にして深く奇麗なり 正面

外には見す又天門冬

に薬師堂能野権現有 多宝塔有客舎登り下りて数軒有山中の谷なり

は所々ニて見る奇麗

白米八合を以て壺升といふ 都て紀州ハ在々多く其例なり 此泊りに年頃三十余りの

なる蔓草なり つり

男なるが 物真似の上手にて江戸下りの新八に越へたり 上るりも並ならず按摩を職と

舟などによし

す 都て京師共に是を一躰にさすりと云 此もの洛中外イの様子を物真似にさへつりし

江戸下りの新八

を聞しに奇々妙々

三月廿七日 東風終日雨 山中なれば殊に朦々と暗く 出立より雨具にて軒に添ふて

雲かゝる山のかなた

登る 又下りて湯川と云村あり 夫婦坂といふを越て野中村大坂峠 是迄に古墳共多し

はいつこともしらて

あたりの農民にとへと年ふりてしる人なしと いか様にもよしありけなる五輪石塔共

今夜の宿さたむら舞

なり

若一王子

又向キの野中村迄の内ニ 若一王子の額打たる権現の宮所々に有 近露村爰に大なる

花山法皇御納経の所

川あれと水干にて歩行渡りす 是より登る坂を十丈峠と云 所々に茶屋あり 花山法皇

御納経の所なりと古墳あり

都て此渡りの民家ハ 坂上に石壇を登り下りて石垣に地面をかゝへて一軒宛居れり

高原村といふ所に着けば申の半也 歩行かうして賤力家に宿す

心よしと今宵ハ休む 新宮の舟上りに別れたる京の男兩人には 今日十丈の茶屋にて

再び逢 堺の老女には新宮の舟上りを別れたり

三月廿八日 晴風立て涼し 宿を出て芝村より富田川と云處に小橋有 甚見事なり

汐見峠

普請は所々過たり 両岩の岩組作りなせるか如し 京師西山の清瀧に似たり 汐見峠と

云所なと茶屋よし芍薬の真紅なる花盛りなり 古国には見ぬ赤さなり麦畑ハ赤らみて芥子ハ散過たり 長尾村に峯の松作りなせるが如き老樹一カ所にあり景色といふべし

往々て見須村は能宿^マなり 女の機織を見るに其手練京師西陣の錦を織が如く 機具もあや取も余国になき形なれば、其拍子のおもしろさに立寄暫く見物す

紀の風皆是なり 程なく田辺か棚辺と云城下町湊にて 紀州の倍臣^マの領なり 茶屋に入て昼生魚を買て喰 川有人家多し

(鍋は鋳か)

江戸屋善五郎篤実の

人 屋なれと 人中よりも殊に篤実の人柄にて心能^マく休足^マ 此辺都て高野を出て高原といふ宿にて泊りく茶屋くに至迄 悉く木の節シ自作のたばこ盆を用ゆ 山中に多く有て

見真似に皆如此^マか

三月廿九日 晴 岩代を立て 切り目ト云所町並よし 船渡し有 切目土王子と額を

打たる社有 処の人にとへど只氏神なりとのみ覚へたり

いわれを問へば清姫

印南村は町並よし 露草村上野村爰ニて菊作を見る 大輪の色々秋菊に替る事なし上

この処にて草^マりを捨

の嶋村さゝやきの橋といふ

たるといへり

十三塚

有畑中を通る 往還の右方畑の中に清姫学草履塚ト云文字を銘したる石を立たり 十
三塚といふも有 塩屋村といふも家並よし 又嶋村ト云所に日高川あり船渡しなり兩岸
の普請は 水中の地面に大石を敷石垣蛇籠を臥せ 誠ニ大增結構の最上なり

小松原村よき家並也 町家に機織音のおもしろく聞捨かたきに立寄て 幸にかつて

天音山千手院道成寺

(借) 昼飯を調ふ 鐘巻村といふ門前に茶店多し 石壇を登れば仁王門有 天音山千手
院道成寺と云

本堂は圓通殿の額也 寺内三重の塔堂前に安珍の塚いにしへの鐘樓の跡 上戸宮下戸

宮 王子権現宮などいふ諸堂多し 中にも見馴れぬ御佛ハ大頭の弥陀佛といふ有

佛鉢恰好にも不相応の作にして 不^マ似^マ合^ミ御^ミ頭^{クシ}上也 時に参詣の中に僧ありて かゝる
佛像ハ世に稀なる也 懇に拝すべしと此いわれも物語れと聞もとどめず 都て立派な大
寺なり

原谷村茶屋の主人久

米八

此辺四方開けたる土地にして村々多く道すがら民家引続きたり 申の上刻原谷村とい
ふ茶屋に宿す 主は久米八といふ

四月朔日 晴 宿を出て下るに 山下共に原谷ト云 獅子カ瀬峠爰にも茶屋有 三軒

共に奇麗也五野瀬といふ小村有

川河^マ季井関村 川橋戸野村 中村など何れも小村也 湯浅とふ宿大場にて町並よし繁華の處なり 入口出口に橋有 方圓坂径カ坂ト云まで三ツ登りて茶屋有 休て柑子を食 雲雀山右に見ゆ

夫より伊登か坂といふ 小石立の下りにて石車ニ乗て左りの膝頭を突 両面の股引散々にすり切て 痛み堪かたけれど召連たるもの共に後れは見せじと 草葉をもみ付血を押へ膝頭を摺りすり下れば 伊登香村といふに稲荷の社物ふりて尊し 爰にて天門星を初て見る 蔓草にして見事なる草なり 甚雅なり 爰に横萩^マ右大臣農成卿の娘中将姫繼母の讒に依て此處へ捨られしと 古事物語の旧跡なりとて雲雀山得生寺ト云寺有 面前に

娘中将姫

雲雀山聳えて景色よし

姫の御影其外調度共宝物多し 立寄て寺中を一見し出て有田川といふ舟渡有 川の向ハ宮原村とてよき宿有 宿屋へ入奥の腰懸へ通りて脚絆を取 伊戸香坂の疵口を見て附薬し昼す

今日の道すがら湯浅の宿より村々引もきらず 畑ハいふに不及^マ 山の峠まで密柑の木多く余木少し茶屋にも家毎に商ふ

弘法太師の三尊佛
往々て蕪坂と云を登り下るに 山中に弘法大師瓜形の三尊佛有 手向の松とて側に老樹有 一ノ坪村といふに八幡の大社有 加茂村を通藤代峠を登りて能茶屋共有 爰に海

底より上り給ふといふ 石地藏有其社地の上の岡に 御所の芝ト云景色の地面有 故を
問へば昔花山後白河の先帝行宮在所なりと 岡の上に赤土の奇麗なる平地有り

宮在所

後ロハ木立物ふりて前は紀の浦々より泉州 摂州 播州の嶋々迄眺望かきりなく 眼

下ニハ清水の湊人家の賑ひ 船々の出入和歌浦の景色画裡のことし 遙に坂を下れば

巨勢の金岡

中段に巨勢の金岡が筆捨の松硯石とていかにも硯面自然の大石有

今日は幸に和歌山へ行年の頃廿余の野方跡や 先に連立けるが彼が案内にて 御所の
芝などと云ふ處にも立入ぬ 下りくゝて藤代村ニ至れば爰に本宮 新宮の一の鳥井なり
とて野中に石の大鳥井あり

此處にも則権現の宮有 尤大社にて大樹共楠檜などの老木日も洩さず至て古社也

日方の宿主 干鰯屋

茶屋有 町々を通り過て日方の宿に泊る干鰯屋専八といふ主なり

専八

人家多町長し 時ハ申の半なり今日道にて 猿バラといふを初て見る 花黄にして藤

の如く葉は合灌木に似たり 木ハ小柴なりトゲあり 此辺の諺に山でこわびはさるばら
里でこはひ御庄屋殿と唄ふとなん

四月二日 晴 日方の宿を立出れば 左右共平田にて往還広し 左り方に木立物ふり
たる岡有 浜の宮とて伊勢大神宮の行在所也

四方皆郡中なり 往々て紀三井寺門前に至れば 左右茶屋くの呼声かまびすし 広
小路を通りて仁王門より石壇長々と登る事三段なり

芭蕉の碑の裏に末代

爰に芭蕉の本句石に銘じたり 見上れば桜しまふく紀三井寺と有 誠に見上れば梢の
中に堂塔ハ甕を並へ見おろせば玉津嶋の入口盆中の景あり

幻佳生涯風羅談笑中

又塊亭翁といふ石有 時雨やしかれぬ沖の帆は白し 此碑の裏に六十有七半醉告老達

不讓詩歌松塊亭誌ト

観花句松青自銘塊亭翁又座左房尾花庵といふ有 只言は鳴まし和力の浦ちとり 又仁王

アリ

門の前に千塚と銘したる碑あり

塊亭翁

あつめける其名ところを人とはゞ 数も千塚にありと答へよ 無論離言と有 そも

く紀三井寺の観世音の境内は 前に名におふ玉津嶋の景色を庭中にこめ後には名草山
の勝地眺望かきりなく 都て圓通三十三所の中にも石山寺 三井寺と京崎清水長谷寺に
此御山とを景色のミならず 道場の結構何れをか勝り 何れをか劣れりとせむ実には海内
の霊場といふべし いと尊く感涙軀に銘じてまかでぬ

さて御門前の茶屋へ下りて 玉津嶋へ渡らんと便よき處を問ふに 爰の茶屋より渡る
は順道なれと 人氣あしく旅人をかすむと向きに道者の伝へあれば 茶屋共立かゝり便
よく渡さんと手引袖ひき留むれと 耳にも入れず小ざいかの渡しといふを 尋ね行道に
て三蔓ミカンといふ處より渡るは 殊に近しとをしふるに任せて 其あたりへ尋行けば 男と

も阿加撥^{アカハ}舟洗^{フナシ}なとして居るあり 爰は村中の堀を通して みな舟にてよろつの事なすと見へたり 此所にて程よく船賃を出して向地へ渡る是ハ幾^キ数^ス子の渡しといふ也

妹背山

大明神と申は玉津嶋

の御事なり

扱入江を渡れば田畑の中を暫く分け迷ひて村々有 入江に随て玉津嶋の拝殿に至るに岩上に老松枝たれ奇岩怪石筆舌に達かたし 爰に案内せんとて幾人も立迎ふ 壺人を雇ひて言ふに随つて見廻る 先妹背山といふあり 是ハ東照宮の御台所を祭れりとなり 大明神の御宮ハ引上りて一構あり いと尊し 此神垣に小野の小町か袖摺の堀とて名所あり 芦辺の茶屋和歌の浦伝へ名におふ 片男館の岸辺ハ石垣を畳み片町にて漁家軒を並べたり

沖は淡路嶋 播摩潟と続きて限りなき詠^{ウタ}めなり 見廻りて城下へ出てんとするに 右の岡にかうくたる木立有 石壇を見上るに目のまふか如し 是は天満宮なり 楼門の額は高陽門の三字なり 社内立派なり 東照宮は殊更にて一ノ鳥井^{マヅ}前より 老松物ふりたる様社堂の結構おもいやるべし 石の大鳥居の銘に東照宮掲月華表^{ケツ}石維明維堅萬世跡と両の柱に銘せり 左右に石燈籠数を尽せり 各御一族の寄進銘有 石壇の下に谷水流れて高欄橋下の岩石庭前の如し とりくつて社堂の結構はいふばかりなし 三重塔二重の樓閣流石ハ国中の大社と見へたり 漸々村有て禅林有五百羅漢を安ず 境内に秋葉権現社有 是又大社にて参詣賑々敷^{マツ}境内高き岡の上に舞台有て 遠見景色有 道の側に

高き山あり頂に社堂有 妙見堂也と各和歌浦の景色に入れり 並木の松の海道を歩行^{マツ}か
らうして和歌山の城下に至るに 此口は悉侍屋敷にて町家見へず行に随つて大身の家々
多し 町々尤長し 城ハ通りの左手木立の中に見ゆ 尾州の名護屋には及ばず町々も残
なく通り過て 茶屋にて昼す

頓て並木の海道はるゝと返るに 松の枝をおろす事あり 役人とも立かゝり下手す
都て此国に限らず 並木を労るはいふに及ばず 小柴松葉至るまで其制ありて侵すも
のハ罪科に行るゝと也

坂本村山家屋に宿す

往々て八軒屋ト云處有 過て紀の川舟渡し也 田畑の中を行民家続き坂本村といふに
宿す 家ハ山家屋といふ申の下刻なり

四月三日 晴坂本のやとりを立出て名におふ根来山を見はやと 田畑の中を通りて境
内に登れば 下寺多く山内広太の太寺にて いにしへ繁昌の頃をおもはる 焼亡の後建
たりと見へて堂塔多是新敷^{ヌイ}く多宝塔はむかしのまゝなり 伽藍の跡礎のみ多し 山へ入
るに唐金の不動尊石坐の上に立せ給ふ 上作と見へていと尊し

寺領も昔の面影のみ残りて 百事右ニ準^{マツ}して疲^{マツ}ひきりと 山内を出て東坂本三谷中村
なといふを過 粉川の宿に入れば市中の賑い只ならず近辺の大場也

町々を通り行けば粉河寺の仁王門に至る迄 観音の靈場に稀なる平地也 中門の間に石壇に登る 其辺悉く庭中の如く奇石怪岩花木を集め深山幽谷の躰を筑り中門ハ普請中也

本堂も結構にして諸堂例の如く各備れり 父はゝの恵みも深きと謡ふを聞て 我身のむかしをおもひ出て さんけの涙せきあへず まづ出て本トの町伝へ通りぬけ高野の辻といふ追分ニ至る

し 古可^マは寺 涙ながらに謡ふ声 名手穴伏といふ村々あり 爰にて茶屋に入て昼す 爰は伊勢への追分也 前に紀の川流る 右ノ方に妹脊山有 この二山の間を吉野川は流るゝ也

山川に付て登る暫行て一ツ家の茶屋有 此處にて堺の老女に逢へば 留められて爰にも休み堺に来らば必ず尋ねよなと いと懇に暇乞して別れて 又山川に付て登り広口村平村なと山坂を登り下り四十八ヶ瀬といふを過て 大久保ト云山中の一ツ家に宿す 数千丈の谷を見おろすがけ作りの民家なり

日暮れて主の男帰れば又程なく来るものは物語を聞き今日は 見渡す所谷間にも又家一ツ見ゆ 何れも葛屋^マ称也 主は山へ出て賤の老女人居れり時ハ未のさかりにて いまた日高けれと行向には泊屋なしといふに せんすべなくてわびなから爰に留る

陣屋に召されて松前 殊ニ此女懇なり 簀戸の内に入りて見れば内ハ影を隠すへきしきりもなく 只一間な

の役にされたり此事
を妻子につけなばさ
ぞ歎くならんといふ

を聞て眠る

九重も八重立雲の奥

とてもおなし初音の

山時鳥

り あばらなる板敷の上に縁とりを敷て坐せば 床の下ハ谷底より霧立のぼる 四方は
遠近の山続きみな夏木立也 日暮るゝに随つて霧深く弓はり月は そことも知れずいと
と古郷マコの事などおもいつゝけ詠めわびて臥ぬ

夢ともなく郭公の初声に覺めて枕を上れば うつゝに鳴て返るを聞けば 海山を隔て
てもなれのみず替る事なし いかにして今日もきかんほととぎす 深山の奥の旅ねなら
ではとずして 夜明けて供なふふたりにとへば聞ずといふ

四月四日 晴 此山中を立出ても また／＼登る峠迄處々に一ツ家有 登詰て下る事

甚急に四十丁余りにして宿房数多有 順礼觀世音泉州槇尾山遊福寺なり

幸なるかな今日法華千部読經の處へ余り合たり 大衆集会して舞樂の最中なり 良く

聴聞して午時の休足やすみなればまかり出ぬ 本堂の側に尊けなる僧出て 紅葉の守ハ此寺の

根元也とて其外種々の守共を出して拝せしむ 強てハすすめもやらず殊に殊勝におぼゆ

弘法大師

御坂を長々と下りて横山ト云小村有 天野山といふ真言宗の大有 弘法大師の旧跡

なりとて諸堂嚴重たり筋堀也 諸侯の寄附多し 境内に堀有 石橋を越して高き山上に

靈々たる社堂美々敷見上る又塔頭多し

仁王門の内に村有 則寺中にて出るにも寺門有 此横山にて茶屋に昼す

此辺はや河内なり 今日広口ト云村にてかなめといふ木を見る 水落村野村といふを

通るに接待ありて 主の男懇にいへば立寄て休むに 寺小屋にて弟子共数多居れり 茶と草餅などを出して 柱に男女の牌名をはり置たり 父母のなるべし年若の主なれと

殊勝の心ねに念佛して立出ぬ

富田林に宿す

夫より古市村 錦郡村此辺何れも国元にていふ中奥の跡にて甚わびしく 至て不景気の村々のみ也 富田林といふに未の半ばかりに宿す 離坐敷にて次の間京都の男女三人相宿あり

四月五日 晴風立て涼し 富田林を立出て新堂村川面村をへて上ノ太子村に至るに

御廟の様高野山の奥村中カに仁王門有 科長山叡福寺ト云 則上宮太子の御廟所也 多宝塔あり諸堂魏々たり 洞の内常燈也御廟ハ石の玉垣おし廻し 岡の下ハ樹木森々たり 土留の石惣廻りに

不残^マ経文を彫て廻り数百間先帝の陵ニも類ひなし

夫より通宝寺ニ入感得の本尊とて殊ニ霊場也 山内奥深く入れば頼信公義家公の御廟は各魏々たり

頼信公・義家公 頼義公ハ本堂の側に有 山内の様子御廟の物ふりたる得も言ひかたし 村里の名も通

宝寺ト云 壺井村には八幡宮側に権現の社並立り故を聞しかど忘れたり

役ノ行者

御門前に靈水あり 是を以壺井といふ旁故あり 大黒村には天童山大黒禪寺有 役行者自作の大黒天日本最初なりといへり 小寺なり

爰を出て右ハ駒ヶ谷と云 左ハ古市村なり 国内に河有河に添ふて村里あり 此故に河内と云うか 下国と見へたり

往々て玉出村に玉手山安福寺とて 浄土宗かに見へて大寺あり 境内広く眺望其絶景松ハ樹毎に作りなせる 其外花木多し 羊腸たる坂道を登りて遠見するに 河内の国内眼下にあり 五歩十歩に堂塔あり 山内高キ所に尾州前代の墓有 其故を問へば奇怪の事也

尾州公前代の墓

頓て方便ならんか 龍眼内の木彼御家より寄附の札を建たり初めて見たり 唐桐の面影有 都て此山中播摩の書写山に似て隠か也

順路を尋ねて道明寺村に至るに 仁王門前に茶屋あり 側に大なる池有て鯉鮒小亀足音に浮ひ出る 殺生禁所寺内広く諸堂多殊に天満宮ハ大社なり 影向の宮は門を閉て内到大樹の杉有 もくげむ樹ハ此内にあり 見廻り茶屋に入りて昼を遣ふ

又誉田村といふに移八幡宮を拝す 是又大社也

河内藤井寺

夫より五番札所の河内藤井寺へ参れば 爰は平地にて町家を過て仁王門に至る 寺中に藤の大樹有類ひなし 聖武帝の御寄附なりといふ 紫雲石の燈籠一基あり 是亦類な

藤の大樹は聖武帝の

ご寄附

雄略帝の陵

塗師屋治兵衛

き細工古雅にして殊に濃かなり藤の本に茶屋共あり 本堂の後に寺有庭の山水尤奇なり
爰を出て嶋泉村といふには雄略帝の陵あり 一ツ家村といふ 民家続を往て堺の宿に
入泉州の大場なり 町長々と暮にかかり塗師屋治兵衛といふ離れ坐敷に入 京都東本願
寺止宿にて 今日^マは旦家^マどもの饗応に浜屋形において網を引せ馳走 暮に及旅宿へ帰る
行粧を見むと 町中賑々敷し

四月六日 陰 亭主見立ながら妙国寺へ案内す

門内に入るに 京本能寺 本国寺も不及^マ結構なり 五重の塔は東寺八坂より小振なれ
と 細工は殊に籠れりて都て諸堂共美々敷 名におふ蘇鉄^マはいふも更也

扱天満宮是又結構也 取わけ社内の林泉人作に及ばざる 結構木石ともに奇々妙々也
亭主に別れて爰の湊も名高處なれば 町々を経て彼處に至るに大河なり 木津川とい
ふ 帆柱^マハ麻^マからを立たるか如し 向は淡路瀉浪もて結べると詠しけむ もとはりなる
景色也

大増の普請也

近年公義の也といへ

往々て難波屋の松に暫く休みて 坐敷の様子見物の往来を見るに引もきらず 此外堺
は茶屋多し 中に難波屋の松に劣らぬ大樹あり 続いて是齋といふ薬店大家なり
夫より住吉の御社に詣れば 境内遙に隔たりて諸国の海客信心の輩より奉納の石燈籠

松原の甚助

大なるハ石壇のはしごを登りて火袋に望むあり 都て大小の夜燈幾千万といふ事をしらす 大鳥居のかゝり御橋の反り 松原の甚助より見ゆるさま絵に見しよりも 眼さむるけしきなり

お宮ハ近ごろ雷火に焼たりとて 御本社造営最中也 諸堂あらかじめ出来たり 惣て御社の神さびたる尊さ己が心から多くの国々見廻りしに くらべくもあらず覚ゆ 諸国より寄附奉納山の如く 岡の所々の彼麓吉北岸におふてふ草は 何れと問はまほしけれとよるべなくて空しく打過ぬ

次に天王寺 是も近年焼たり 造立の企あれとはかく敷も見えす 諸堂多くハ仮殿もなくて焼崩れたる礎のみ残りて さしもの伽藍もぼうくたる焦土となり 又いつかはとおもへばいと哀なり

焼残りたる石の鳥井すゐに彼名高き転法輪所の額および亀井の水舞台の池中にハ 鯉 鮒 小亀ともハむかしのまゝ也と 又式ツの梵鐘ハ仮堂内に釣て勤行おこたらず 参詣施主の願ひに任せて 僧出て読経し廻向して鐘つき鳴らす声絶ず 双輪塔は叡山よりいと小さけれと 焼残りて有り

太閤秀吉

そこを出て茶屋有庭は山水を造りて景色は事もおろかや太閤秀吉もめで給ふ處なりとて 俗称天下茶屋と云数寄屋迄構へたり 人家立並ひたり

天下茶屋村

都て天下茶屋村といふ 今日ハ爰に昼す 夫より生^マク玉の宮といふを拝みそこにて河内屋要左衛門か住家をとふに 大坂の町中多くハ見へたり

是より市中に入れば月江山鳳林寺と云禪林の法会ありとて 事ごと敷^マ簾を立て遙にさまく鳴ものゝ声々しく 拍子とりの音事すさましく聞ゆれば 尋行て見ばやと爰の辻かしこの小路を分入れば大寺有 門内より本堂までの見込も立派にて 殊に法会の飾りとりくさまく賑いたり わけてもあやしきは本堂の入口に本尊向ひあふて年頃廿余りより 五十余迄の男共帷子に麻上下を着 緋毛^マせんの上に居並び銘々^{ツルバン}箒^マにかゝり躍り上りく叩く口ニは 念佛を高声に囃子ながら唱ひ大汗を流してさけぶ いかなる血気の若ものも顔を赤らめて堪かたく見ゆ さながら乱心騒氣の如し

箒^マの裏にハ番付の札をはりて列を揃へて居並べり 参詣の老若男女は常ある事とみへて あやしとも思はず 真顔になつて見居るのも亦あやし 京師にて過シきさらき嵯峨の柱 松明の夜この振舞ありしが 夫に増してあやしく怪^マ有の事なりと覚ゆ

此事ニ付て数月已前より おのか業をやめて稽古すと聞く いやく腹をかへてまか出ぬ

長堀板屋橋東詰 河内屋要左衛門

夫より町々を尋ね廻りて未の半ばに長堀板屋橋東詰 河内屋要左衛門を尋付て休^マ足す 夫婦に手代兩人浅からぬ饗応にて入浴す 長途の疲れにや鼻血少し出たり

京師宮川町の火事

四月七日 冷氣にて終日雨 今日ハ汚衣の洗濯を頼む 七戸もの見せ来れりと聞く
又 京師宮川丁昨夜より今朝まで焼たりと聞ゆ 但し三条通りにて火鎮れりと也

四月八日 東風にて雨 未刻より風替り晴たり

橘為仲朝臣

昨今要左衛門に休足^マ 今日^マは誕生仏の手向とて大坂中家毎高き竿の末につゝじの花を
結付て裏の方軒端に立たり 結び方ハ古郷^マにて盆の高燈籠の如し 京師ともにおなし
要左衛門二階の置物堂上の筆と見へて 橘為仲朝臣 みちのをくに侍ける時歌あまた遺
しける中に

加賀左衛門

白波の こゆらむすゑのまつやまは

花とやみゆる 春の夜の月

要五郎案内

四月九日 晴風立涼し今日は大阪見物せんとて 要五郎案内にてまつ在^マ栖山^マ新清寺へ
参れば 石壇の上に寺有 本尊観世菩薩いと尊し側の舞台ありて大阪中を遠見す

景色甚佳にして大寺なり 井の水清潔にして寺号は恥す 又本堂の柱に題して無逢誓

几海天広玄妙圖通宇宙周

夫より板松山一心寺 是又能寺也 寺中にむかし茶臼山にて戦死の姓名を切付たる石塔数多あり 其外誹^{つづ}師淡々の石碑も爰也 茶臼山ハ寺の側に有老松森々たり 次に高津宮に移る 石壇を登りくへて御本社を拝し奉れば 右近の橋 左近の桜あり宮中の結構

申すも愚かなり 拜殿より浪華の分野悉く見下す 高き屋の御製感するに余りあり

老梅に柵をふり廻したるあり 是なん王仁か咲や此の花と詠したるなりと申も 恐れ多かれといかにも海内の勝地なり

大坂一の大社 天満

是より一先旅宿へ立歸り昼支度し再び立出 此度は天満天神宮へ参詣するに 爰ハ大

天神宮

坂一の大社にて結構いふばかりなし 通り筋町々の賑ひも此神社に寄ての繁昌と見ゆ

御霊の社は殊に見せ

社内は物賣見世物 参詣の群集引きもきらず 夫より御霊の社は又おなし様なり 片

物様々なり

の如く賑ふ

坐摩大祖神

夫より西東本願寺ハ京都に次ぐ坐摩大明神と云大社有 余国に聞ぬ神社なり 稲荷大

稲荷大明神

明神立せ給ふ生玉大明神へ再び参る 大坂中を眺望す

要五郎

四月十日 晴涼し けふハ要五郎も腹痛とて出されば 案内もつれず上下宿を立出先

新町をさして行 道筋の町々を見廻り 難波といふ處の皐月を見んと 田道を遙に過て

難波村に至り 人家の裏に入て見るに 杜鵑^{サツキ}花の大木^キを筑^{ツク}るの如く 一株にして枝葉のはびこりたる事三間余り花は満開ならねと 半ばは開きいかにも世に類なき大木也

是より先キ木津川の湊口まで行て 廻船の懸りたるを見るに 柱は麻のことく並び居て船ハ水面を隠して萍の茂りたるが如し爰ニて茶屋へ入て難波村の田中へ懸る

慈雲山瑞龍禪寺
此の立所に彼名におふ鉄眼の寺有 慈雲山瑞龍禪寺と云

けふは幸に大法会ありて大坂の町々近在の参詣引きもきらず 門の左右に題して日法
席殷昌抓起別伝之旨宗門顯煥宏開逸格之途 寺中は大衣^マ星^{ホシ}の如並居て 讀經の万声堂内に響く鐘太鼓の拍子取聞なれぬ耳には尤おかし 其勤行終りて三千佛名を唱へて拜あり
伽藍なり寺中蓮池有 諸堂を見廻りて阿弥陀が池へ移る 寺は和光寺と云 本尊池中に奉安置景色よし 夫より新町を見廻り砂場へ出て名物なればそばもあれど鯉鮓を喰和泉屋といふ いかにも大家なり

休足^マ所ハ雲^マ手^マに在りて幕を以仕切る女とも給仕す 勝手には若き男とも大勢そば鯉鮓を切るもあり 有鯉^マ婦^マしの蔵々数戸前大騒なる事もいふもおろか也

奥ハ坐敷く庭ハ木石殊にいふはかりなし 一家の内に見所多く暫く爰に隙取立出れば 町中に八幡の大社有 見物す町々等歩^マ行^マ疲れて帰

要左衛門妻の案内

四月十一日 晴 涼しく次第に暖なり

今日ハ要左衛門妻案内にて 道頓堀芝居見物す 茶屋までは要左衛門内の男先ン達にて坐敷結構いふはかりなし 床には海老若の像を懸たり 暫くありて妻並隣の筆の軸を商ふ内妻兩人来支度宜との案内にて拭敷へ登れば 仕出し所より女来つて饗応す

各絹布の褥をもふく 我等上下三人宿より女兩人に茶屋女ともに已上六人入る 芝居ハ三番叟より見る 翁渡し有千歳および面箱を持出る 共に本式なり

梅川忠兵衛

外題ハ姫小松子日遊にて 大切は梅川忠兵衛上るり咄語り 三味せん共五人中にも壺人国太夫の名人有 重盛は大出来と見き おやす尤上手なりき 夜五ツ時に済芝居は大坂にととまりたりと覚えじ

四月十二日 晴 未刻より時々雨にて途中にて傘を借り暮より大雨

今日は要左衛門案内にて宿を出て 先江州竹生嶋弁天財並觀世音出開帖ありとて 大雄寺といふへ行けば 兩尊躰はいふに不及彼皇后宮介経雅の青山の琵琶其外に種々宝物共賑ひ例のいふ斗りなし

楠正成

大塔ノ宮護良親王

夫より山毘山毘陽寺と云にて 大和信貴山比沙門天出開帖あり 此尊像は楠正成の守本尊なりとて殊に名高し 宝物は大塔ノ宮護良親王の咽輪並山伏といふ横笛および簫二

管 鼓の筒桶公菊水の簾壺流地は白ヌメの如きに薄藍の紋なり

太刀一腰其他古画名筆数多挙て言がたし　そこを立出て四ツ橋右に見て　饅頭の名物
虎屋といふに立寄　鵠の池の家作を見るに長屋作りにて銘士屋敷マツの如し

石工の内へ家毎に入りて石細工の数を見る　夜燈石鉢の類ひ色々様々なり　御霊の宮
へ参り社内の賑ひいふはかりなし　人形芝居あり　菅原伝授手習鑑上るりハ当時海内の

上手なりといふ麓太夫なれば　此芝居へ入て今日は暮をおかして帰るに　京師守山屋よ
り昨日出したる状到来す　急ぎ開封するに伏見の稲荷祭ハ　明十三日より十四日なれば
早々に登り候様かならずと申来に大坂の名残もたゝならねと兼ては申合たれば　此登も
心元なくて　高瀬の夜舟に登らん事を亭主要左衛門に詔らへ語りて　上下其心得にて用
意す

四月十三日　東風ニて雨降　未上刻斗りより風替り雨晴れたり　今朝の雨ニて夜舟は
如何と見合つれと　風替り雨晴れたりば急き申の刻はかり船よりの誘におもひ立　要左
衛門妻子に長の心支マを謝して宿を立出　淡路屋といふ舟宿に往て三十石の程　五人前
の席を竹にて仕切上下分布団四畳入　何れも要左衛門父子共送り来て船中の取扱までを
申含め　淡路屋の宿前より漕出すに橋下幾度ともなく乗ぬけ　河口に出れば水面渺茫と

して諸廻船は芦原を見るに異ならず 川舟は登る有下り有 さす棹引綱行ちかふさま目の舞ふか如し

舟子共船の両縁を渡りて船中弁用す 又 船賃ハ要左衛門の計にて八百六拾貳錢とか 外に船中にて三度が家来共へ乞ふ 乗出しの橋は久宝寺橋といへり

次第に空晴て十三夜の月あさやかにさし出たれば左右の村里山々の遠けしき絵も及ばず 八王多山崎淀の城辺を通り 白々と見へて橋下を過明れば 卯月十四日寅刻はかりに伏見なる大佐といふ船宿へ上るに 同船は左ばかりならねと先きに着たるも多かれは大勢の入込にて宿は混雑せり 爰にて朝の支度し旅のもふけに

四月十四日 晴 まだ明やらて宿を立出ける時

出ていなば浮名やたたん草枕

ふしみの里ハまた夜ふかきに

朝戸も明ぬ町々を通りぬけ 右も左りも郡中を過竹田街道といふをたとるく安楽寿院の前へ出たれど 爰ハ過し頃委敷見置たれば等閑に通りにて東寺村といふ稲荷の御旅所へ出 五社の神輿を拝見するに両社向い合て一社に神輿三ツ 一方は貳ツ安置し給ふ神楽の結構滅金の光りに 堂内まばゆきて耀けり 四角なるあり 六角有御屋ねに鳥の羽

をのしたる有 宝珠の上りたる有 都て田舎には見ることなき御飾りともなり 神前には禁庭および仙洞の御備物 白木の台に御札を付て嚴重たり

其社内を出れば御道すからタアの盛りおもひやるべし

提灯の雨覆屋根の黒

左右には引もきらず夜燈立並へたり 洛中に入れば両側の家毎に高提灯を立続け 台

ぬり真鍮の鉦町毎に

ニハ屋根有 提灯の模様紋共家毎におなし町々ニ依て差別有 洛中の御通り筋に残提灯

別々なり

はいふにおよばず 家毎に思ひくの幕打廻し金屏たて並べ 緋毛せんを敷て家内ハ綺

羅を尽せり

台田仲禮

此度の旅宿ハ兼て台田仲禮に申合て木屋町ニて 山本市兵衛が坐敷をからんと約した

山本市兵衛

れと 一先守山屋へ立寄れば平兵衛夫婦強子にとむるにもだがたくて 爰に止宿する

伊井掃部守

に今日ハ伊井掃部守上使として上京ありて 西本願寺への通行を見る 是ハ太子春宮に

成らせ給ふ御歡の御使也と聞くなり 程なく伏見稻荷宮の祭禮とて五社の神輿松原通を

通行ある大紳太幣御剣 其外神宝の類綾綿の袋に入たる品々 御供ニハ神職の人々衣冠

にて馬に乗たるも美々敷見ゆ 一通にて難見尽五条橋のうきめを取かへさんとして大佛前

まで跡や先に付廻り暮になれば ともしび天を焦し町々の提灯ハ丁毎に画る紋及び模様

共に異なり竿高しと雨覆あり 壺丁限に揃ひたるは墨繩を打たるが如し

此灯籠に引れて松原通を東洞院辺迄登り廻りて 五条の宿に帰れば今宵ハ西陣の

織物屋来りて予が相伴とて留めて馳走有り 見せ先キの幕は絞り簾の中より通りを見る
に おもひくゝに仕組なしたるニハカとも引もきらず 間にハ小うた上るり

主の守平

笛 尺八の類ひ耳目に暇なし 夜更ぬ主の守平西陣の客に紫野の大徳寺の坐敷く拝

見の道引を頼む

彦根中道殿

四月十五日 晴 今朝 彦根中将殿上使にて数日逗留有り 御使の事果て京を立出る

戸沼甚兵衛

行装を見んと守平案内にて三条通行けば 名におふ大路も人ごみにて足は地に付かず
からうじて戸ある処へはさまり居 行列半ばかりを見て群る中を通れ出ぬ 處ハ三条
の川東にて守平がしれる内なりと途中にて戸沼甚兵衛に逢ふ

松屋清左衛門

夫より松屋清左衛門へ立寄れば 戸口にて三上廉達と入替る 又与市左衛門へ立寄れ

三上廉達

与市左衛門

ば国の川内より登りたる女とともに逢兼て 与市左衛門に頼み置たる単物染入仕立ともに
出来に付又単羽織も杉織とかいふを一反買て仕立に遣す

文季卿の和歌

今日 お守山に江戸へ下り給ふ伝奏禮之内 文季卿の和歌をとくゝ盛りの花よりな
れ来つゝ 声さて薰る枝のうぐひすとある短冊を見き 題して花間鶯と有

守平

四月十六日 晴 今日 安平と申合 四条の大芝居へ上下四人茶屋に付て入 朝五ツ

傾城倭荘子

半時拭敷程よし

梅川忠兵衛

外題ハ傾城倭荘子といふ切りに梅川忠兵衛有 暮かけて済入りはいふも更なり

大坂要左衛門

今夜大坂要左衛門訪来 明日昼船に下るといへり

四月十七日 晴 午下刻より雨に成る 今日午の日なれば 加茂影向祭を拝んと兼

て期したりしに 又紫野大徳寺伝手の人に通し 十四日守平が懇に頼みたれば 其旨向
キへ申入置し由を 朝とく使して申来れば 先西陣の懇口人の方へ守平案内にてさして
行 此人先立して織屋を見物し裏の坐敷甚風流に雅なる調度とも多し 茶菓子など流石
都なり 職駄に似合しからぬ様なりき 表ハ数の織ものにて眼もあやなり

此家の主じと外に両三人 先達の方共に五六輩になる内に 難波より登りたる頓て拝
見の友有 上下八九人にて先本坊の坐敷く庭古雅なる事いふばかりなし

次に天瑞院惣見院なといふ坐鋪く庭前の木石目も及ばず 床棚のあたり又畿内ハい
ふに及ばず 四国 九州の名産遠来の材木喜美尽せり ふすま障子屏風は勿論悉く金
地にて狩野家の古画多く 永徳下りて探幽友松の類ひ墨絵あり 極彩色有 松竹梅に桜
の間菊に紅葉にあるハ 雲水に龍其外花鳥何れも一間限に一品の絵多し 何の間くれ
の間といふ大僊院真珠庵にハ一休植髪の像有すが如し 門は則聚落亭のむかしの儘なり

とて 鏤めたる金地数百歳の自今ありくと残り

左甚五郎

織田信長

花鳥の彫物ハ左甚五郎の手段を尽したるなど 塔頭数ヶ寺各疊を並べたり 悉くは禿筆に難書取^マ 寸松庵は五尺五寸間の守也 古実ある事なるべし 畳ミ天井ともに同じ寸なり 寺々の廻廊惣じて拭ひ椽を歩行に 板敷悉く虫の鳴なる音す 大徳寺に限らず都て京都の古刹ミなかくの如し 大工の秘事也といへり 今日此寺の構塔頭のかゝりを見てその可美信長亡^{メツ}後に 焼香の争いをおもひ出らる

是より今宮の社に至りて茶屋に入れば 彼の守平がねもところ人のあるじして 酒肴さまゝの中にも珍しきは木瓜なりき 田舎口ニハ生の蓴菜に鯉のさし身鰯^マの粕焼等なり 茶屋かくて風流なれば暫く時を移して上加茂へと出懸たり 今日ハ影向の宮の御神車ニて御勅使立給ふと聞く 急ぎ上加茂に至れば御正躰はや御入有りと聞く 供奉の輩ハ各休所へ引取御神馬四神の御銚其外御行列の道具共 神前に立並べ暫して衣冠の人々上下夫々に列して様々の行ひあり 神前は両社也 御扉の上にハ神と葵とをさす 御神供を備ふる作法至て嚴重にハ脚の机の上にすへて階を下り拝礼ある 此供物を奉るも数人を伝へて上官の人御階の上へ登りて奉る 悉く上下差別 有此人々ハ皆裾を引 拝礼終りて御膳を下れば高坏にお菓子やうの物をもりて奉る ハッ脚の机ともに何れも朱なり 拝礼終て各退出す

西陣の亭主彦兵衛

今日 此神事に預る人々 上下悉く葵桂を髮冠にさす 参詣の貴賤に給る様なれば立寄て戴く 此事を拝み果て下加茂へ下らんとすれば雨ふり出て 我も人も下加茂の茶屋に入て雨もよひするに 今日所々の見物に連立たる大坂人並西陣の亭主彦兵衛ともに 此處に待居又盃出て暫く時を移すに 雨をやみなくふれば 糺川の水上に懸渡したる茶屋の景色いと見所あれど 雨ハ弥増に社地の夏木立の影くらく帰路の程をおもひ 煩らへば最前の五人に残多立別れて 上下四人わらぢを買ふて夜に入て五条へはい入ぬ

増左衛門

四月十八日 東風にて雨冷し 今日ハ坂本の祭へ登兼て心懸たれと 終日の雨に例の増左衛門といふを呼て灸治す

四月十九日 晴 午刻より又雨に東風にて冷氣甚し 白川越にて時鳥を聞所々あれ
いつの世に又やこへ来て語らはん

すゑ白川の 山ほととぎす

親鸞の遺物

朝晴れたれば 思ひ立て江州坂本の祭とて京極通を一さんに白河村へさして行ば石細
工様々あり 山中村といふに親鸞の遺物とも様々開帖の所二ヶ寺有

此處ハ志賀の山越なり 則志賀村といふ志賀寺の旧跡道の左りに木立物ふりて草庵有

穴桜寺といふ

長坂を下り直に唐崎へさして行ば 其賑ひ例に倍せり 神輿御迎ひの船とも数十艘旗吹流 迎山に立並へ幕の中より空鉄砲を打立るには耳の置處なし 今日祭の古例也とそ

兼平の駒つなぎ松

此所へ神輿渡給ひて神供を備ふとて 其船ニハ御膳の具共多く飾り立たり 松の本の人立茶屋の群集元もいひしらず 是より湖の浦伝の兼平の駒つなぎとて古松有 七本柳といふ所は神輿の御船に乗給ふ汀也

御船式百石程なりとておなし程の船七艘繋ぎ合せて各番付七社ノ神名の札を立たり 船中ニハ神輿を据奉る黒ぬりの台をもふけ今やと待奉る風情なり

扱 坂本の宿は此春比叡山より見廻り宿したる柴屋何がしは 彼山より契りて懇なる主じにて爰の祭の頃ハ かならずと約したれば彼方へさして来しに 先客数多にて亭主やるせなき気色なれとせんすべなきに親族の方へ案内するに 心はづれにていぶせき籠居なれと 朝暮の賄および調度ともまて 何くれと亭主の心尽しにめでて爰に止宿す 斯て坂本中の宿々は皆みちくたり

暫く爰に休足して坂を登り本社に詣れば七社は一ノ宮八王子十禅師客人宮なとして神輿の美麗京師の祇園に劣らず 各形ち異なり皆御神を以て覆ふ御屋根の上神雀の付たる

は一社は是は六方なり 余ハみな宝珠を上たり

御迎行列ハ真先キに鉄棒又割竹を引もの侍烏帽子大紋にて 数十人先を追ふ声かまびすし

此田楽法師と言もの 次に獅子舞田楽法師四ヶ所の棧敷前にて珠数をする 所々作妙也 又其珠数の如き物

棧敷には彼か唱事有 も奇なり綿帽子着たる老僧五人 真先に大幣又大木の櫛數十人にて引来る

て機具の箴の如きなる左右に持て摺る 御鉾等様々の行列の中に立祢宜ハ 衣冠にて馬上是も仕切ゝに数人中に兎は王佐冠に赤き官服にて馬上衣傘をさして是又数人 甲冑の衣徒夥敷く鎧に侍烏帽子着たる数十人 各々帯刀の上に太刀を持 甲冑の者都て三百人といふ

といへり 御剣を持たるあり 七社毎に其品有 神へ前後の警固きびしく拜礼の上下見物の貴賤

いかなる大雨にも笠かふり禁し無礼のものを制する声勢破竹の如し 此行列本社へ詰て神輿の御前にて行ひ有 事終りて神輿を昇奉り走り下る数百人声々天地震動す

甲冑の者三百人といふ 駕輿丁ハ白麻の一重に憤鼻褌は厚物に金糸を以 色々の縫もの善美を尽せる事 角力の土俵入の如し

其内に多く衣徒頭布 先一番の神輿は大宮と申奉る牡丹の紋の桐油を用ゆ 二番ハ二ノ宮葵の紋也 三番ハ

に鎧たる有多く帯刀 聖真子と申ス橘の紋 四番ハ八王子と申す 五ハ三ノ宮と申て二本杉の紋也 六番ハ客人宮菊ノ紋なり 七番ハ十禅師と申ス桐の御紋也

甚だあやし

俗ハ侍烏帽子に鎧た

る有

初の大宮と二の宮ハ夫婦神ニてましますと土俗申す

扱神輿次第して昇奉るに数百人 山も崩るゝばかり鯨波をあけて 神輿を昇ぎ奉るに御坂を走り下る音震動す 出御ハ申の上刻只一散に七本柳の船場へ着御ある

扱船場には御迎船式百石積程の船を一社に式艘宛繋ぎ合て 中に神輿を据奉る 台を設けて各社の御名を書たる札を立 八艘の外に御供船ハ奉行と覚しき人々の乗船ハ幕打廻し 武器および吹流等立つらねて警固す 神輿汀へ着御するや否 我勝に競ひ立て御船へ昇込み奉る

第一番に乗せたる處ハ其年の吉事ありと船端の争ひあはたゝし 見るめも肝を冷すばかり也 船毎に忌竹を立並べ供奉の船々にハ太鼓打立乱調耳を驚かし 神燈は海上を灼す

夜船唐崎に至る

終夜大雨なり

夜船唐崎に至れば神供の悉く終りて元トの七本柳へ亥の下刻ばかりに還御有る 終夜大雨なりき 都て坂本の祭の事騒々しさいはんかたなし 神供は粟の飯を粟津の里より調進する故膳所といふ里の名も 其故なりとて大柳ハ大津より奉るなり ここの里人日吉へ贈り奉る也

惣て此祭神申ノ日申ノ時を用る事也と 此御社に限り怪きは鳥井マヰの中程に笠木の上に真向の屋根あり余になき形なり

山城の加茂祭

都て二十一社也 社家の中にも御坂登る右手の屋敷に真ン紅のしだれ桜有り 雲の上より糸をミタせるが如く 盛りは咲もおくれず 散りもはしめぬ頃なりき

四月廿日 酉の日 朝蔭次第に晴 けふハ山城の加茂祭なればとて 坂本をつとめて立出 ひた道に坂を登り詰て路をかへり見れば琵琶湖の景色一瞬の内にして 前手にハ竹生嶋其外小嶋あり 前にハ堅田の浮御堂 馬手ハ唐崎に続きて名だたる浦伝ひ 矢ばせ辺迄残なく見おろさる

此山越にてきのふも今日も 京人および所々の見物に馴近付ぬれば あかでも人にとおもひ出られぬ

ゆきくゝて白河の山中にて石切る様をも見つゝ行ほどに 下加茂の社内へは其日巳ノ刻半バころに着く あなたこなたの賑ひを見廻し難く たもとおり居る程にはや御勅使ちかづまり給ふといふに 加茂川の土橋の詰なる賣席に休らひ居るに 彼土橋ハ御車通行のためにあらたに設けたりと見へて 盛り砂にて橋両べりハ青竹の手摺あり繩を張つて渡る事なし

御先キの見ゆるや否 繩をとれば御先キを追ふもの侍烏帽子に大紋を着したる 鉄棒を引音はるかに聞ゆれば 真ンに尊く嚴か也 さばかりの群集なれど片ずを吞ンで拝見

するに 最初ハ社人衣冠にて馬に乗り一通り過て又鉄棒を引

夫より歩行立の公家衆追ヒ懸に弓箭を帶したる数人あり 其外馬上の公家有 駕も数人此所に御車来る 黒牛の天鷲絨の如くなだらかなるに 真ン紅の厚房燃立ばかりに飾りたてたり 鞭を持たる舍人数人御車の飾り言語に述がたし 大さ九尺余と見ゆ 惣黒に金ン紋透間なく飾れり

前の御簾の両端より白綾のしぼり模様なる物 長柄の元トへたれ出たり 葵かつらは御車に輪違に懸たり 舍人ハ牛の鼻より長柄に添ふて 両辺に立並ぶ御車の左右に立たる人々は青茶色に山吹の花葉を押付たる装束に袴ハ白地に赤くばやしたるに 草のはゞきを付たり 又弓箭を帶たる供人 是は追ヒ懸に後の方ハ唐輪に卷たる冠を着す

さて又朱色の皮の如き緋毛氈を畳みたる程なるものを 肩に懸たる供人兩人おなし装ひにて左右に立 其色至て赤くきら／＼と日に映して光り蜚引きの如き物也 いかなるものか問ハまほしく覺へたり 虎の皮も持せたり御車の跡に鞭持たる童子六人が立 是は黄なる装束に桜の作り花を處々に押たり

引替の牛有 何れも黒也厚織ものの袋に琴やうの物を持たる有 藤の花松にかゝりたる絹笠巻本 桜花の絹笠ともに式本御車の跡に立柄式間程此作花至て美しく廻り 常の立傘より大ふりなり

鳥井前より下桑ある黒ぬりの階子よりす 勅使ハ社内に見打廻したる清メ所に入給ふ車は仮に設けたる車屋に入置 牛ハ仮屋有りて是亦休足せしむ 清メ所へハ衣冠の人数々出入して洗漱の料を上る様子に見へたり 其御行ひ暫してそこを出給はなりとするに御供の官人各用立あつて楽器共人物よりとうでて 空すみわたるばかり 音楽にて神前へ進行ある其中に厚織物の袋に入たる長きものを持たせ給ふハ和琴なりけり

頭先二人して中なる人これを弾く すべてものの音さしにも木深き加茂山に響きて志んくたり

勅使ハ三十ばかりの齡ひ美にして優なり 黒装束に此人ばかり石の帯てふ毛の飾り色々有りて見事也き 袴やうのものハ薄藤に例のハツ藤の紋なり 裾ハ二枚重ね長々と引但裏一重ハ紅也 御通行筋広々として左右ハ 竹の垣を構ふたれば 見物の貴賤ひしくと取付て守り居るに脇目もふらず しつゝ 拝殿へ上りたまふさま 真々に絵の如し 拝殿の中央上壇に至り 拝礼事終りて笏に持添たる宣命とおぼしき上包よりとり出給ふを見るに赤き紙なり 朱唐紙の厚きが如きものと見へたり 恭しく捧けて読上ケ給ふれと 其音聞へ様読終れば 神殿より黒装束に王佐冠 頓て裾を引たる人をばしまを下り 露路ハ杳をはき拝殿へ上り 勅使の側に跪て宣命を受とり 又もとの如拝殿を下り神殿に上りて御簾の中に入 次に紙にて包たる箱物二ツ被献 別人が来て元トの如使被遣なり

礼すれば 幾度も会釈せらる件の如御箱物も神前へ持登る

次に已前の如き装束せる別人 葵柳を串にさして恭しく捧て神殿を下り勅使に渡せば
戴て冠にさす 此事両度有 此往返の間暫く時を移して事終れば堂を下り床几にかゝれ
ば 神馬式正但壹疋ハ裸脊に轡がけたる白馬を引立 社人付添舎人共神殿を三返牽廻す
次に金銀を鏤めたる鞍置の黒馬に 緋の厚総もえ立ばかりなるを 神前へ牽立参らす
れば 社人先立して本社を三返引廻して其事終れば 音楽伶人の舞両度あり 四人立か
と覺へし其内は勅使神前の大庭に床几に懸り事終れば側なる御休所へ入給ふ

暫して上加茂へと通行ある行列最初の如し 勅使着坐ありて神殿御簾の内へ神供を上
る式暫有り 朱塗の八脚の机式脚持来て供物共並大高坏何れも式ツ宛皆朱ぬり也

烏帽子に狩衣とも言つべき社人 御饌所より持来れば取次の社人つまりゝに立居て
次第して持行神前の御階の本より中壇に立居る人 勿論上壇に待設る 人々ハみな黒
の衣冠に裾をおぼしまに長々と引取り次々として御簾の内へ捧れば 内人取て奉る躰な
りき 葵は社家の方より持来て神前に備るのミ余ハ下加茂の作法の如し

扱拜殿の事終れば勅使は堂を下りて床几に懸り例の御馬式正社壇を三返牽廻す

此時既に暮におよべば 勅使の前へハ左右へ箒を焚神馬ハ松明也 次に神殿と拝殿の
間の大庭にて舞楽あり何時も両度也 但し楽器ハ何れも勅使の行列に入 太鼓鉦ともに

持たせらる 伶人舞終れば勅使其場をしりぞき給ふて 内の御鳥井^{マヰ}を出て埒^{マヰ}のもとに來り給へば競馬有 此事下加茂ともにおなし 神官の人と覺しくて装束花やかなり

出立にて年頃廿余りの容貌美なるが 埒^{マヰ}の内下より上々式人立て飛が如く乗る代るく三度が埒^{マヰ}の弓手馬手には数万の見物震動す馬ハ躍り上りて駈ん文筆にこそ達したり 共かゝる事にはいかがあらんと思ふに案の外なり

下加茂ハ白昼の事なれば 馬場の乗出しより計り留メまで遙ニ見渡さる

上加茂ハ夜中松明の提灯万燈なれと 立騒て勝劣も見得わからず 都て五番へも乗るか 下よりは人数も多くおもはれる

扨 是より先勅使拝殿へ入らせ給ふと御本社内門の左り神官往來する方より 鋸乗物に数多の婢被ニて数人付添入來ル有 怪敷^{マヰ}て脇目もふらず見入るに 供の男共皆退き駕を被の女共取寄て 御門ニて卸し戸を開けば官女の出立なる 緋の袴と言つべきを着し 供の女育負上ると白綾の衣を頭上より 官女の足の見得ぬまで懸て 御殿の方へ負ふて入しが古への円院などの役目に出るもにや する人ニ聞かまほし供の女とも被なから皆入し

扨 又民家警固ハ御内門の左りに 長屋を仮ニ補理幕打廻し 内に上下の御役人列を糺して並居けるが勅使御通行には番所前へ下りて土下座す 不残^{マヰ}上下着用なりき御馬褌

に轡懸たると鞍置と二疋は其向ひ御内門の右に仮屋有て繋き置たり 牛車は鳥居の外御車屋の隣に休所あり

宮中の御儀式悉終りて御馬引上ケ舞臺競馬ハ御事の果なれば 時刻ハ戌の下りになん有ける さはかりの群集そろゝと散失せ 今迄並び居たる知人もいつしか立離れて見るゝに 心をとられ人いづれも夜風に堪かたく寒ければ 上下三人爰の影かしこのくまに立廻りて御事の終を見果んと勉かうする

その内に勅使還御のけしき見得て 有りつる燈一倍して先ツ御先を追ふ鉄棒の前左右に松明 夫より次第して二挺ツツ立続け 長々と御車の殿りまで焰々たる光り天を焦す御通行筋は已前より走りあるよし

加茂川の仮はしを渡り 京極通暫く下り右の方新道より直に御所へ御通り夜中も参内あるものとぞ

其間立廻たる町家は屋形の前ともいはず松明の火ほこりハ屋の棟に飛かゝれと 火消のさたも及ばず 鉄棒の音御車のさしる音のみして しつゝと還御あり

火の光りニいざない立られて 京極通真一文字に五条塩竈丁仮坐敷へ駈付しは 亥の刻過たり おのれが好な痒よりいふなるべけれとも此程経廻りし国々 どの祭りかし この盛りと名だたる見るも皆今様のぞ急ぎのみに 騒々敷見所なきを 今日此のみま

津りにかけまくもかしこき御末迄幾千世となく伝マツい来し葵かつらの絶せぬ 天子の御祭
なれば 尊さ身にしみわたりて覚し 誠に海内壯觀なり

(二帖終)

青森県立図書館解題書目刊行一覧

第1集	津 軽 史	昭和46年10月21日	発 行
第2集	官省指令留・官省願伺届	昭和47年3月10日	発 行
第3集	滝 屋 文 書	昭和48年3月10日	発 行
第4集	木 村 文 書	昭和48年11月25日	発 行
第5集	多 門 院 文 書	昭和50年2月1日	発 行
第6集	五 家 文 書	昭和51年3月31日	発 行
第7集	萬 日 記 抄 一	昭和52年3月25日	発 行
第8集	萬 日 記 抄 二	昭和52年7月28日	発 行
第9集	萬 日 記 抄 三	昭和53年3月25日	発 行
第10集	津軽史解説目次抄一	昭和54年6月25日	発 行
第11集	津軽史解説目次抄二	昭和56年3月5日	発 行
第12集	津軽史解説目次抄三	昭和57年3月15日	発 行
第13集	津軽史解説目次抄四	昭和58年3月15日	発 行
第14集	津軽史解説目次抄五	昭和59年3月25日	発 行
第15集	萬 日 記 抄 四	昭和60年6月24日	発 行
第16集	萬 日 記 抄 五	昭和61年6月26日	発 行
第17集	萬 日 記 抄 六	昭和62年6月20日	発 行
第18集	大 津 屋 文 書 一	平成元年1月31日	発 行
第19集	大 津 屋 文 書 二	平成2年12月15日	発 行
第20集	松井四郎兵衛留書	平成3年1月18日	発 行
第21集	伊 紀 農 松 原 一	平成4年3月31日	発 行

A 025		
A		解題書目 第21集 青森県立図書館編 青森 平4 251P 21cm 内容：伊紀農松原 一

平成4年3月25日印刷

平成4年3月31日発行

編集 青森県立図書館
 発行 青森市新町二丁目4番30号
 電話 0177 (22)-1111
 内線 5484~5489

印刷 東奥印刷株式会社
 青森市古川二丁目17番5号
 電話 (76)5361 (代)

(中性紙使用)

青森県立図書館



102 1181119 1